

親鴨会 9月メッセージ 「趣味の効用」

今年は北海道も異例の暑さに見舞われたなか、8月末に、妻の両親の墓参りに札幌に行ってきました。市内は観光客も多く、信号待ちで立ち止まると聞こえてくるのは中国語です。

そうした喧噪の中で、まずまず元気に動き回り、食べ歩いている健康な自分で居られることへの感謝の思いが湧いてきます。年齢とともに自由な時間が増えて、自分の都合でいつ何をしなければならないという制約はほとんど無く、子供の頃からの趣味に加えて、社会人になってから始めた趣味(陶芸・街道歩き・そば打ち等)もいろいろ楽しんでいます。

そうした時間の使い方の転換点は、フルタイムの仕事を卒業した 11 年前(65才)だったと思います。その時から世田谷区の風景づくり委員や小学生を対象にした食育のボランティア活動を始めました。当然、多くの初対面の方々との活動が増える中で、ボランティア活動では過去の職歴などの話はタブーですから、対話の取っ掛かりとして趣味の話は無難なテーマになります。まさに趣味の効用といえるのでしょうか。「正しいか、正しくないか」でなく「好きか嫌いか」といった話ですから、どちらに転んでも人間関係が傷つくことは有りません。

そんなことを考えつつ、学生時代に某出版社で辞書編纂のバイトしていた時のこと、その辞書に携わっておられた国文学者の先生から趣味は何かと聞かれたので「鉄道、ジャズ、読書」と答えた途端、「本を読むことは人間が生きるために必要な事。読書を趣味と言ってはいけない。」と一刀両断にされたことを思い出しました。

しかし、今も読書は好きですし、好奇心の源泉であることに変わりありません。

親鴨会会長
内池 正名